

現代朝鮮語の漢字語〈流音後濃音化〉浅析

辻 野 裕 紀

1. 前言

1.1. 本稿の行論

本稿は、現代朝鮮語の漢字語における〈濃音化〉、就中、〈流音後濃音化〉¹について論ずるものである。

まず、流音後濃音化がいかなる現象かを簡潔に説明し、本稿の関心が奈辺にあるかを概観したのち、ソウルにおける筆者の調査の結果分析を通じて、若年層（20代）ソウル方言話者の流音後濃音化の実現様相について肉薄していく。

1.2. 〈流音後濃音化〉とは

現代朝鮮語の漢字語において、①先行要素が流音 /r/ (ㄹ) で終わり、②後行要素が /d/ (ㄷ), /j/ (ㅈ), /s/ (ㅅ) で始まる場合、後行要素の頭音 /d/, /j/, /s/ は各々同一調音点の濃音（喉頭化音）/δ/ (ㄸ), /ζ/ (ㅉ), /σ/ (ㅆ) と交替する²。本稿ではこうした形態音韻論的現象³を〈流音後濃音化〉と呼ぶことにする。以下、具体例を挙げる：

【流音後濃音化の例】

발달 [발달] 《發達》, 발전 [발전] 《發展》, 발사 [발사] 《發射》

周知の通り、流音後濃音化は上の例の如く、所謂二字漢字語、すなわち2音節漢字語においてはほぼ例外なく起きる。しかし、3音節以上の漢字語においてはそうとは限らない。

まず、車美愛（1996）が指摘するように、流音後濃音化は、식물 도감 《植物図鑑》, 생활 수준 《生活水準》, 기술 직원 《技術職員》の如き4音節（2音節+2音節）の漢字語において

¹ 現代朝鮮語には「濃音化」と称される現象がいくつもある。流音後濃音化以外には次のようなものがある：(ア) 口音の終声の直後における濃音化 (e. g. 잡지 [잡찌] 《雑誌》), (イ) 子音語幹用言における語尾の濃音化 (e. g. 신고 [신킨포] 《履いて》), (ウ) ㄷ連体形の直後における濃音化 (e. g. 먹을 것 [머글것] 《食べるべきもの》), (エ) 漢字語における例外的（語彙的）な濃音化 (e. g. 헌법 [헌뽽] 《憲法》), (オ) 合成語における濃音化 (e. g. 비빔밥 [비뽽뽽] 《混ぜご飯, ビビンバ》), (カ) その他 (e. g. 과 선배 [과선뽽] 《学科の先輩》, 버스 [뽽스] 《バス》, 두부 [두부] 《豆腐》（全羅道方言）など）。濃音化については、辻野裕紀（2015a）も参照。

² スラッシュ内は音素表記であり、本稿の音素表記はすべて趙義成・呉文淑（2004）に依拠する。

³ しばしば誤解されるが、流音後濃音化には、先行要素と後行要素の音的環境が関与するのみならず、漢字語という語種が関わっているため、流音後濃音化は、純粋な〈音韻論的現象〉ではなく、〈形態音韻論的現象〉と見なければならぬ。さらに本稿で明らかにしていくように、流音後濃音化には語構造等も大きく関わっており、弥々形態音韻論的だと言える。なお、固有語でも単一の形態素において /r/ の後に平音 /d/, /j/, /s/ が来ることはほとんどなく、濃音の /δ/, /ζ/, /σ/ が現れるのが普通であることから、歴史的には流音後濃音化は固有語にも適用されていたのではないかという主張がある（車美愛 1996: 25-28, 엄태수 2013: 112-113）。慥かに、固有語単純語で流音後濃音化が起きないのは、발표 《告げ口》などかなり限定されているし、윤 《報い》, 외곡 《一筋》など形態音韻論的に語末に [rs] を持つものに母音で始まる助詞類が付くと形態音素 [rs] が [ls] で実現することなども考慮すると、蓋然性の高い卓見だと思われる。しかし、その実証には語史論的考察が必要となり、本稿の射程外である。茲ではひとつの説として紹介するにとどめておく。

は基本的に起きない⁴。

次に、3音節漢字語においては流音後濃音化が起きるものと起きないものの双方が混在している。

例えば、辞書類を参看するに、〈2音節+1音節〉という構造の3音節漢字語では、시찰-단 [시찰단]《視察団》, 선발-전 [선발전]《選拔戰》, 이발-사 [이발사]《理髮師》など、流音後濃音化が生じることが多いが、쟁탈-전 [쟁탈전]《爭奪戰》, 특별-시 [특별시]《特別市》, 수술-실 [수술실]《手術室》など、同じような音的環境にあっても流音後濃音化が生じないものが少なからず存在する。

同様に、〈1音節+2音節〉の3音節漢字語でも、몰-상식 [몰상식]《沒常識》, 불-성립 [불성립]《不成立》などでは流音後濃音化が起きる一方、몰-지각 [몰지각]《沒知覺》, 불-섭생 [불섭생]《不摂生》などでは流音後濃音化が起きない。

また、3音節漢字語における流音後濃音化には個人差も観察され、さらに辞書によって見解が異なる語もある⁵。

事程左様に、3音節漢字語における流音後濃音化は複雑であり、検討を要する。流音後濃音化は、表記に反映されない上、合成語⁶という語構造論的な性質上、辞書に見出し語として立項されていないことも多いため、朝鮮語教育上の問題としても屢々立ち現れる。例えば、과실-즙 [과실즙]《果実汁》の発音が [과실즙] なのか [과실쥬] なのかは非母語話者にとっては全くの判じ物である。

本稿は、若年層（20代）ソウル方言話者を対象とし、流音後濃音化、就中、3音節（以上）の漢字語におけるその実現様相を闡明せんとするものである。

2. 先行研究瞥見

流音後濃音化は、従前の多くの朝鮮語音韻論の概論書、朝鮮語教科書でも言及されている。しかし、具体例として挙げられているのは多くの場合、2音節漢字語（所謂二字漢字語）のみであり、本稿が攷察の俎上に載せんとする、3音節（以上）の漢字語において流音後濃音化が起きるか否かについての論及は、管窺の限り、あまり見当たらない。

こうした中、車美愛（1996）や배주채（2003）は、3音節以上の漢字語における流音後濃音化について論じている。

車美愛（1996）は、流音後濃音化⁷が起きないものを「例外」と捉え、その例外を「語の内部構造」と「語彙の特徴」から分析している。その結果、「独立要素+依存要素」よりも「依

⁴ ただし、車美愛（1996）によれば、독일-주의 [독일주의]《獨一主義》, 물질-주의 [물질주의]《物質主義》, 비밀-주의 [비밀주의]《秘密主義》などのように、後行要素が주의 [主義]の場合には濃音化が起きることがあるという。その理由について車美愛（1996: 9）は、주의 [主義]が「意味的にもまた音声的にも（つまり母音連続があるため単母音に縮約されやすく）独立の要素というより依存要素的に感じられ」、「厳密な複合語」に近くなるためではないかと思われる」と述べている。

⁵ 例えば、출발-지 [출발지]《出發地》は、국립국어연구원（1999）では流音後濃音化が起きることになっているが、油谷幸利他編（1993）では起きないことになっている。

⁶ 本稿では、単一の形態素から成る語を「単純語（simple word）」、複数の形態素から成る語を「合成語（complex word）」と呼ぶ。また、「語基+語基」という構造の合成語を「複合語（compound word）」、「接頭辞+語基」や「語基+接尾辞」という構造の合成語を「派生語（derived word）」と称す。

⁷ 車美愛（1996）の用語では「側音後濃音化」。

「存要素＋独立要素」のほうが例外が多いこと、また、内部構造が関与しない場合の例外は、語彙的に限定された類の語（伝統的な概念を表す語や固有名詞など）に集中していることを説明している。流音後濃音化が起きるか否かの判断は、3種の辞書の発音表示に拠っている。

배주채 (2003: 275-278) は、3音節の漢字語の例を豊富に挙げつつ、「3音節語に含まれる1音節の形態素の種類によって濃音化の如何が決定されるが、同一の1音節形態素が付くときも濃音化の如何が異なる例がある」⁸と述べている。1音節形態素への着眼はある程度奏効しているが、それ以上の分析はなされていない。流音後濃音化が起きるか否かの判断は、論者の内省に拠っている。

いずれの研究も示唆的な指摘を含むが、分析の視座が単面的である点、流音後濃音化実現如何の判断方法⁹などの点で瑕を認めうる。

3. 研究の方法

筆者は、前節で剔抉した既存の研覧の問題点を踏まえ、若年層（20代）のソウル方言話者全15名を対象に、先行要素が流音 /r/ で終わり、後行要素が /d/, /j/, /s/ で始まる3音節以上の漢字語合成語306語の発音について調査を行なった¹⁰。全306語のうち、83語は〈1音節＋2音節以上〉の合成語、209語は〈2音節以上＋1音節〉の合成語、8語は漢字語人名（姓＋名）、3語は〈画家名＋전【展】〉、3語は〈著者名＋저【著】〉である。

調査方法は、筆者が事前に準備した調査票の語をインフォーマントに読み上げてもらう、所謂〈読み上げ式〉¹¹を採った。

4. 分析

以下、分析結果を、〈1音節＋2音節以上〉の合成語、〈2音節以上＋1音節〉の合成語、漢字語人名（姓＋名）、〈画家名＋전【展】〉、〈著者名＋저【著】〉の順に述べていく。

4.1. 〈1音節＋2音節以上〉の漢字語合成語

〈1音節＋2音節以上〉の漢字語合成語については、全83語を調査した。先行要素の漢字語形態素¹²に着目しつつ、結果を纏めると次の如くである：

⁸ 原文は朝鮮語。日本語訳は引用者による。

⁹ 辞書の発音表示は規範的なものであり、必ずしも実際の言語事実を反映しているとは言い難い。また、濃音化実現如何の判断を論者の内省のみに依拠するのも危うい。特に流音後濃音化のように個人差の存在が予想される現象については、可及的多くの母語話者の協力を得つつ、定量的に稽查するのが、その実態を把握するための鍵である。

¹⁰ 大半は3音節漢字語だが、一部4音節以上の漢字語も含む。調査は、2015年9月に韓国ソウル市内で行なわれた。

¹¹ 「読み上げ式とは、紙に書いた単語や文をそのまま、あるいは方言に直して読み上げてもらう方式の調査である。」（木部暢子 2007: 33）

¹² 「漢字語形態素」という概念とその性質については、辻野裕紀（2013: 17-20）を参照のこと。

【表 1】〈1 音節＋2 音節以上〉の漢字語合成語とその流音後濃音化実現率

先行要素	語 (ハングル表記)	語 (漢字表記)	流音後濃音化実現率
골 【骨】	골-세포	骨細胞	20.0%
	골-소강	骨小腔	33.3%
	골-소체	骨小體	73.3%
	골-쇄보	骨碎補	53.3%
	골-조직	骨組織	46.7%
	골-종양	骨腫瘍	13.3%
몰 【没】	몰-상식	沒常識	86.7%
	몰-지각	沒知覺	13.3%
밀 【蜜】	밀-도살	密屠殺	46.7%
	밀-수입	密輸入	66.7%
별 【別】	별-다례	別茶禮	0.0%
	별-도리	別道理	20.0%
	별-사건	別事件	20.0%
	별-세계	別世界	40.0%
	별-세상	別世上	26.7%
	별-수단	別手段	33.3%
	별-순검	別巡檢	60.0%
	별-재간	別才幹	60.0%
	별-조식	別早食	26.7%
	별-지장	別支障	20.0%
불 【佛】	불-도량 ¹³	佛道場	40.0%
	불-사리	佛舍利	53.3%
	불-세존	佛世尊	73.3%
불 【不】 ¹⁴	불-상능	不相能	33.3%
	불-섭생	不攝生	13.3%
	불-성공	不成功	26.7%
	불-성립	不成立	46.7%
	불-성실	不誠實	66.7%
	불-세출	不世出	53.3%
	불-소급	不遡及	60.0%
	불-소화	不消化	46.7%
	불-수의	不隨意	60.0%

¹³ 「場」の朝鮮漢字音は량ではなく 장 (<당) だが、茲では漢字語として扱っておく。朝鮮語の母音間におけるㄷとㄷ의の交替については、河野六郎 (1961/1979) を参看されたい。

¹⁴ なお, 불 【不】はㄷ, 스の直前ではㄷ이脱落するため (e. g. 부도덕 《不道德》, 부자연스럽다 《不自然だ》), 流音後濃音化が問題となるのはㄴで始まる要素と結合する場合のみである。

	불-승인	不承認	20.0%
	불-신용	不信用	26.7%
	불-신임	不信任	20.0%
설【舌】	설-신경	舌神經	40.0%
실【實】	실-사회	實社會	73.3%
	실-생활	實生活	80.0%
	실-세간	實世間	66.7%
	실-세계	實世界	60.0%
	실-소득	實所得	53.3%
	실-속도	實速度	40.0%
	실-수요	實需要	46.7%
	실-수익	實收益	46.7%
	실-수입	實收入	46.7%
	실-시간	實時間	86.7%
	실-작자	實作者	20.0%
열【熱】	열-소독	熱消毒	20.0%
	열-전도	熱傳導	26.7%
	열-지수	熱指數	20.0%
열【烈】	열-장부	烈丈夫	73.4%
월【月】	월-삼경	月三更	20.0%
	월-세계	月世界	13.3%
	월-수입	月收入	33.3%
일【一】	일-단락	一段落	93.3%
	일-삼시	一霎時	20.0%
	일-삼우	一霎雨	60.0%
	일-생애	一生涯	93.3%
	일-수유	一須臾	60.0%
	일-주야	一晝夜	73.3%
일【日】	일-삼복	日三服	60.0%
줄【拙】	줄-수단	拙手段	53.3%
	줄-장부	拙丈夫	86.7%
철【凸】	철-다각형	凸多角形	20.0%
	철-다면체	凸多面體	20.0%
	철-집합	凸集合	20.0%
철【鐵】	철-석영	鐵石英	46.7%
	철-세균	鐵細菌	40.0%
	철-주자	鐵鑄字	60.0%
출【出】	출-세간	出世間	73.3%

칠 【七】	칠-성사	七聖事	93.3%
	칠-죄종	七罪宗	60.0%
칠 【漆】	칠-조각	漆彫刻	73.3%
탈 【脱】	탈-석유	脫石油	20.0%
	탈-수소	脫水素	46.7%
팔 【八】	팔-대문	八大門	86.7%
	팔-성도	八聖道	80.0%
	팔-정도	八正道	80.0%
	팔-준마	八駿馬	40.0%
혈 【血】	혈-사경	血寫經	80.0%
	혈-소관	血小板	100.0%
활 【活】	활-단층	活斷層	20.0%
	활-선어	活鮮魚	66.7%

【表 1】から分かるように、〈1 音節 + 2 音節以上〉の漢字語合成語の流音後濃音化は、語毎に差異が認められ、究極的には語彙的に規定されていると考える他ない。しかし、いくつかの視角からデータを照らすことで、言語学的傾向をある程度見出すことが可能である。

まず、【表 1】から〈1 音節 + 2 音節以上〉の漢字語合成語の流音後濃音化平均実現率を算出すると、48.1%である。

次に、同じく【表 1】を基に、調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が50%以上の先行要素を A 群、調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が50%未満の先行要素を B 群、それ以外を C 群とし、先行要素となる漢字語形態素を分類すると次の如くである（括弧内の数字は当該の漢字語形態素を先行要素とする語群の流音後濃音化平均実現率である）：

A 群：調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が50% 以上	
혈 【血】 (90.0%), 칠 【七】 (76.7%), 열 【烈】 (73.4%), 출 【出】 (73.3%), 칠 【漆】 (73.3%),	
줄 【拙】 (70.0%), 일 【日】 (60.0%)	

B 群：調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が50% 未満	
설 【舌】 (40.0%), 탈 【脱】 (33.4%), 열 【熱】 (22.2%), 월 【月】 (22.2%), 철 【凸】 (20.0%)	

C 群：その他	
팔 【八】 (71.7%), 일 【一】 (66.7%), 밀 【蜜】 (56.7%), 실 【実】 (56.4%), 불 【佛】 (55.5%),	
몰 【没】 (50.0%), 철 【鐵】 (48.9%), 활 【活】 (43.4%), 골 【骨】 (40.0%), 불 【不】 (39.5%),	
별 【別】 (30.7%)	

A 群は「語彙的に流音後濃音化を起こしやすい漢字語形態素」、B 群は「語彙的に流音後濃音化を起こしにくい漢字語形態素」と概ね目してよさそうである。C 群は語によって流音後濃音化実現如何に大きなばらつきがあり、語彙的に流音後濃音化を起こしやすいか否かを即座には判断しかねるものである。

次節以降、さらに形態論的、音韻論的視座から仔細に検討を加えていこう。

4.1.1. 形態論的観点：構成要素の自立性

まず、各要素の自立性が流音後濃音化に関与している。

流音後濃音化が生じにくいB群の漢字語形態素に着目すると、열【熱】(22.2%), 월【月】(22.2%)の如き自立性の高いものが含まれる。これらはいずれも自立語と結合し、〈派生語〉ではなく〈複合語〉を形成している。他にも, 골-세포《骨細胞》(20.0%), 골-종양《骨腫瘍》(13.3%)など、腹背双方が自立性の高い形態素の場合、押し並べて濃音化実現率が低く現れた¹⁵。つまり、自立性が高い要素同士の結合においては流音後濃音化が生じにくい傾向がありそうである¹⁶。流音後濃音化が4音節漢字語では基本的に生じないことを勘案すると、斯かる傾向は、〈1音節+2音節以上〉の漢字語合成語における流音後濃音化の実現如何が、音節数よりも、語構造（複合語か派生語か）に強く統制されていることを示唆している。

4.1.2. 音韻論的観点

4.1.2.1. 後行要素に濃音を含むか否か

次に、後行要素に濃音を含む語においては、総じて流音後濃音化が起きにくい。

調査語彙のうち、後行要素に濃音を含むものは, 실-속도《実速度》(40.0%), 별-사건《別事件》(20.0%), 실-작자《信賴の置ける人》(20.0%), 일-삼시《束の間》(20.0%), 불-접생《不摂生》(13.3%)の5語だが、いずれも流音後濃音化実現率が低い。

就中、流音後濃音化実現率が一体に比較的高い、先行要素が실【実】や일【一】の語群における, 실-속도(40.0%), 실-작자(20.0%), 일-삼시(20.0%)の濃音化実現率の低さを解釈するのに、後行要素における濃音の存在への着目は有効であると思量される¹⁷。これはある種の異化(dissimilation)と見做すことができ、さらに日本語の連濁における〈ライマンの法則〉¹⁸とも類似していて、興味深い。

4.1.2.2. 後行要素が /s/ で始まるか否か

また、同一の語であっても、話者によって流音後濃音化が起きたり起きなかったりするもの、つまり個人差が大きいものは、後行要素が /s/ (ㄱ) で始まるものが多い。後行要素が /s/ で始まる語のうち、流音後濃音化実現如何の個人差が大きいもの（茲では試みに流音後濃音化実現率が40%から69%までのものを個人差が大きいと目す）は、48.2%をも占める。なお、後行要素が /d/ (ㄷ) で始まる語群の場合は22.2%, /j/ (ㅇ) で始まる語群の場合は27.8%であり、後行要素が /s/ で始まる語群とは大きな懸隔が認められる。後行要素が /s/ で始まる語の場合、1回の発音では調査者が平音か濃音かの判断に困窮することが幾度もあり、インフォーマント自身すら平音で発音しているのか濃音で発音しているのかよく分かっていないといった

¹⁵ 先行要素가 골《骨》であっても, 골-소체《骨小体》(73.3%), 골-쇄보《シノブ：シダ植物の一種》(53.3%)などのように、後行要素の自立性が低い場合には流音後濃音化が起きやすくなる。

¹⁶ なお、これは絶対的なものではなく, 일-단락《一段落》(93.3%), 일-생애《一生涯》(93.3%), 칠-조각《漆彫刻》(73.3%)など、例外的なものも多い。なお, 칠-조각については、국립국어연구원(1999)などの辞書では、流音後濃音化が生じないことになっている。

¹⁷ 별-사건については、先行要素의 별が流音後濃音化を引き起こしにくい要素であることに起因するものとも考えることもできるだろう。

¹⁸ 日本語において、後行要素に濁音が含まれる場合には連濁を起こさないという規則があり、これを〈ライマンの法則〉と称す（ただし「なわばしご」の如き例外もなくはない）。日本語の連濁については、高山倫明(2012:105-127)などを参照。

ケースも間々あった。これはおそらく、他の平音が濃音化しない場合には一般に有声音化が生じるのに対し、/s/ の場合には有声音化が生じないことに起因するものであろう。話者自身が平音か濃音かに自覚的でない場合があることを考慮すると、斯かる語群において個人差が出やすいのは首肯しうる結果であり、得心のいくものである¹⁹。

4.1.3. なじみ度

さらに、なじみ度が低い語の場合、流音後濃音化が起きにくい。これは、あまり使われない語、よく知らない語については、インフォーマントが形態素境界でポーズを置いて読み上げる傾向があるため²⁰、そうした場合には、後行要素が /d/ や /j/ で始まる語であっても有声音化が生じず、後行要素頭の平音が無声音で発音されることが屡々ある。例えば、先行要素が 팔【八】の語は、팔-준마《八駿馬、穆王八駿》以外は、概して流音後濃音化を起こしやすいが、팔-준마の流音後濃音化実現率は40.0%と相対的に低めに現れている。これは팔-준마という語に対するなじみ度が低く、팔と준마の間に短い休止を入れたインフォーマントが多かったことに起因する²¹。

4.2. 〈2音節以上+1音節〉の漢字語合成語

〈2音節以上+1音節〉の漢字語については、全209語を調査した。後行要素の漢字語形態素に着目しつつ、結果を纏めると次の如くである：

【表2】〈2音節以上+1音節〉の漢字語合成語とその流音後濃音化実現率

後行要素	語（ハングル表記）	語（漢字表記）	流音後濃音化実現率
단【團】	사절-단	使節團	100.0%
	시찰-단	視察團	46.7%
	예술-단	藝術團	53.3%
담【談】	후일-담	後日談	100.0%
당【堂】	납골-당	納骨堂	40.0%
	대일-당	大日堂	86.7%
당【黨】	단일-당	單一黨	53.3%
	통일-당	統一黨	26.7%
당【糖】	녹말-당	綠末糖	53.3%
	무술-당	戊戌糖	60.0%

¹⁹ なお、流音後濃音化ではなく、鳴音後濃音化の問題だが、後行要素が세【稅】の合成語では濃音化が起きることが多い（e. g. 법인세 [버민세]《法人稅》, 전화세 [저너세]《電話稅, 電話代》）。しかし、濃音化実現如何は語によって異なり、その不規則性の理由について、車美愛（1999: 6-7）は、「推測の域を出ない」としつつも、세【稅】が/s/を初声とするところに求めている。また、車美愛（2004: 25）では、「/h/で始まる濃音化字音素は規則性が低い」と述べている。

²⁰ 既に言及した通り、車美愛（1996）は、「伝統的な概念を表す語や固有名詞的な語」では流音後濃音化が起きにくいことを指摘しているが、これはなじみ度と関係している可能性がある。また、車美愛（2004: 25）によれば、鳴音後濃音化も古い伝統的な語ほど生じにくいというが、これも同断である。

²¹ 因みに、국립국어연구원（1999）などの辞書では、팔-준마は流音後濃音化が生じることになっている。

	분밀-당	分蜜糖	80.0%
대【隊】	경찰-대	警察隊	93.3%
	선발-대	先發隊	93.3%
	정찰-대	偵察隊	86.7%
	직할-대	直轄隊	80.0%
대【大】 ²²	경찰-대	警察大	0.0%
	성결-대	聖潔大	0.0%
	숭실-대	崇實大	0.0%
	예술-대	藝術大	6.7%
대【大】 ²³	실물-대	實物大	73.3%
대【帶】	생활-대	生活帶	100.0%
	식물-대	植物帶	80.0%
대【臺】	수술-대	手術臺	86.7%
	을밀-대	乙密臺	100.0%
	진열-대	陳列臺	93.3%
	진찰-대	診察臺	86.7%
도【度】	굴절-도	屈折度	33.3%
	정밀-도	精密度	86.7%
	충실-도	充實度	66.7%
	친절-도	親切度	40.0%
도【島】	보길-도	甫吉島	93.3%
	자월-도	紫月島	100.0%
도【圖】	삼강행실-도	三綱行實圖	73.3%
	지질-도	地質圖	93.3%
동【洞】	갈월-동	葛月洞	100.0%
	관철-동	貫鐵洞	100.0%
	상일-동	上一洞	100.0%
	신길-동	新吉洞	100.0%
	신설-동	新設洞	100.0%
	신월-동	新月洞	93.3%
사【師】	감별-사	鑑別師	93.3%
	마술-사	魔術師	100.0%
	연금술-사	鍊金術師	93.3%
	이발-사	理髮師	86.7%
	접골-사	接骨師	33.3%
	조율-사	調律師	93.3%

²² 대학 (교), つまり「大学 (校)」の意。

²³ 「大きさ」の意。

사 【士】	기술-사	技術士	100.0%
	연설-사	演說士	80.0%
	해결-사	解決士	93.3%
사 【社】	건설-사	建設社	80.0%
	계열-사	系列社	100.0%
사 【史】	독일-사	獨逸史	66.7%
	미술-사	美術史	80.0%
	발달-사	發達史	26.7%
	생물-사	生物史	53.3%
	생활-사	生活史	60.0%
	소설-사	小說史	60.0%
	예술-사	藝術史	73.3%
사 【辭】	고별-사	告別辭	66.7%
	영결-사	永訣辭	53.3%
사 【寺】	망월-사	望月寺	100.0%
	성불-사	成佛寺	80.0%
산 【山】	구월-산	九月山	86.7%
	비슬-산	琵琶山	53.3%
	운길-산	雲吉山	80.0%
	월출-산	月出山	53.3%
산 【酸】	식물-산	植物酸	33.3%
상 【相】	동물-상	動物相	60.0%
	생물-상	生物相	66.7%
	생활-상	生活相	73.3%
	식물-상	植物相	46.7%
상 【商】	만물-상	萬物商	80.0%
	미술-상	美術商	46.7%
	수출-상	輸出商	26.7%
	어물-상	魚物商	86.7%
	철물-상	鐵物商	73.3%
상 【上】	법률-상	法律上	40.0%
	사실-상	事實上	86.7%
상 【賞】	예술-상	藝術賞	73.3%
	특별-상	特別賞	0.0%
서 【書】	개설-서	概說書	100.0%
	법률-서	法律書	53.3%
	시말-서	始末書	100.0%
	진술-서	陳述書	93.3%
서 【署】	경찰-서	警察署	100.0%

석【席】	특별-석	特別席	0.0%
선【線】	강철-선	鋼鐵線	66.7%
	분할-선	分割線	93.3%
	연결-선	連結線	80.0%
	영월-선	寧越線	73.3%
	제일-선	第一線	93.3%
	출발-선	出發線	73.3%
	포물-선	拋物線	93.3%
선【船】	보물-선	寶物線	93.3%
	침몰-선	沈沒船	60.0%
	화물-선	貨物船	80.0%
설【說】	동일-설	同一說	73.3%
	유출-설	流出說	26.7%
	지행합일-설	知行合一說	46.7%
성【性】 ²⁴	예술-성	藝術性	100.0%
	정밀-성	精密性	100.0%
성【星】	주계열-성	主系列星	80.0%
세【稅】 ²⁵	수출-세	輸出稅	93.3%
	특별-세	特別稅	53.3%
소【素】	목질-소	木質素	40.0%
	생활-소	生活素	80.0%
소【所】	이발-소	理髮所	100.0%
	제철-소	製鐵所	73.3%
	파출-소	派出所	80.0%
수【囚】	기결-수	既決囚	93.3%
	미결-수	未決囚	100.0%
술【術】	접골-술	接骨術	20.0%
승【僧】	유발-승	有髮僧	53.3%
	탁발-승	托鉢僧	13.3%
시【詩】	경물-시	景物詩	20.0%
	풍물-시	風物詩	0.0%
시【視】	동일-시	同一視	53.3%
	확실-시	確實視	20.0%
시【時】	일몰-시	日沒時	26.7%
	일출-시	日出時	33.3%

²⁴ なお, 성【性】は, 自立性の高い要素との結合においては, /r/ の後のみならず, 他の鳴音の後でも濃音化が生じることが非常に多い。車美愛 (1999: 3-5) 参照。

²⁵ なお, 세【稅】は, 自立性の高い要素との結合においては, /r/ の後のみならず, 他の鳴音の後でも濃音化が生じることがある。車美愛 (1999: 5-7) 参照。

시 【市】	직할-시	直轄市	6.7%
	특별-시	特別市	0.0%
식 【式】 ① ²⁶	단발-식	單發式	53.3%
	독일-식	獨逸式	46.7%
식 【式】 ② ²⁷	분열-식	分列式	46.7%
	삭발-식	削髮式	33.3%
	송별-식	送別式	46.7%
	영결-식	永訣式	46.7%
식 【式】 ③ ²⁸	판별-식	判別式	6.7%
	행렬-식	行列式	6.7%
신 【神】	유일-신	唯一神	60.0%
심 【心】	단결-심	團結心	86.7%
실 【室】	기밀-실	氣密室	60.0%
	기밀-실	機密室	40.0%
	대출-실	貸出室	13.3%
	수술-실	手術室	13.3%
	정기간행물-실	定期刊行物室	6.7%
	진열-실	陳列室	20.0%
	진찰-실	診察室	6.7%
심 【審】	사실-심	事實審	40.0%
	제일-심	第一審	80.0%
자 【者】	건설-자	建設者	100.0%
	관찰-자	觀察者	100.0%
	기술-자	技術者	100.0%
	대졸-자	大卒者	100.0%
	대출-자	貸出者	86.7%
	동일-자	同一者	93.3%
	변질-자	變質者	93.3%
	연설-자	演說者	80.0%
	연출-자	演出者	93.3%
	자살-자	自殺者	100.0%
	조물-자	造物者	100.0%
	집필-자	執筆者	100.0%
	해설-자	解說者	93.3%
	헌혈-자	獻血者	86.7%

²⁶ 「方法」, 「やり方」の意。

²⁷ 「儀式」の意。

²⁸ 「数式」の意。

장 【藏】	계율-장	戒律藏	80.0%
장 【場】	도살-장	屠殺場	100.0%
	오일-장	五日場	86.7%
	채굴-장	採掘場	66.7%
장 【葬】	오일-장	五日葬	33.3%
재 【材】	단열-재	斷熱材	93.3%
전 【戰】	선발-전	選拔戰	46.7%
	섬멸-전	殲滅戰	26.7%
	쟁탈-전	爭奪戰	0.0%
	한일-전	韓日戰	0.0%
전 【塵】	어물-전	魚物塵	53.3%
	철물-전	鐵物塵	26.7%
절 【節】 ²⁹	부활-절	復活節	93.3%
	삼일-절	三一節	100.0%
	유월-절	逾越節	93.3%
절 【節】 ³⁰	서술-절	敘述節	73.3%
점 【店】	어물-점	魚物店	53.3%
	철물-점	鐵物店	20.0%
점 【點】 ³¹	출발-점	出發點	86.7%
정 【亭】	갑을-정	甲乙亭	33.3%
	풍월-정	風月亭	73.3%
제 【祭】	부활-제	復活祭	86.7%
	예술-제	藝術祭	66.7%
제 【劑】	부활-제	賦活劑	40.0%
	염발-제	染髮劑	60.0%
	지혈-제	止血劑	93.3%
제 【制】	삼칠-제	三七制	66.7%
	전일-제	全日制	86.7%
족 【族】	말갈-족	靺鞨族	0.0%
	장발-족	長髮族	0.0%
종 【宗】	성실-종	成實宗	60.0%
	십일-종	十一宗	73.3%
종 【腫】	어혈-종	瘀血腫	86.7%
	연골-종	軟骨腫	53.3%

²⁹ 「節日」の意。

³⁰ 言語学（文法）用語としての「節」（clause）の意。

³¹ なお, 점 【點】は, /r/ の後のみならず, 他の鳴音の後でも濃音化が生じることが非常に多い。車美愛（1997: 28-29）参照。

종 【種】	제일-종	第一種	80.0%
좌 【座】	전갈-좌	全蠟座	20.0%
주 【酒】	과실-주	果實酒	86.7%
	매실-주	梅實酒	73.3%
	이별-주	離別酒	86.7%
주 【主】	조물-주	造物主	86.7%
즙 【汁】	과실-즙	果實汁	20.0%
지 【誌】	동물-지	動物誌	60.0%
	박물-지	博物誌	60.0%
	생활-지	生活誌	73.3%
	식물-지	植物誌	60.0%
	예술-지	藝術誌	53.3%
	학술-지	學術誌	20.0%
지 【地】	분할-지	分割地	86.7%
	직할-지	直轄地	40.0%
	출발-지	出發地	26.7%
질 【質】	다혈-질	多血質	93.3%
	동물-질	動物質	93.3%
	식물-질	植物質	93.3%
집 【集】	해설-집	解說集	33.3%

【表 2】 から分かるように, 〈1 音節 + 2 音節以上〉の漢字語合成語の流音後濃音化と同じく, 〈2 音節以上 + 1 音節〉の漢字語合成語のそれも, 語毎に差異が認められ, 究極的には語彙的に規定されていると考える他ない。しかし, いくつかの視角からデータを照らすことで, 言語学的傾向をある程度見出すことが可能である。

まず, 【表 2】 から 〈2 音節以上 + 1 音節〉の漢字語合成語の流音後濃音化平均実現率を算出すると, 64.8% である。〈1 音節 + 2 音節以上〉の漢字語合成語のそれが 48.1% であったことからすると, 巨視俯瞰的には, 〈1 音節 + 2 音節以上〉よりも 〈2 音節以上 + 1 音節〉の漢字語合成語のほうが相対的に流音後濃音化を起こしやすいといえる。

次に, 同じく【表 2】を基に, 調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が 50% 以上の後行要素を A 群, 調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が 50% 未満の後行要素を B 群, それ以外を C 群とし, 後行要素となる漢字語形態素进行分类すると次の如くである (括弧内の数字は当該の漢字語形態素を後行要素とする語群の流音後濃音化平均実現率である) :

A 群 : 調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が 50% 以上

담 【談】 (100.0%), 서 【署】 (100.0%), 성 【性】 (100.0%), 동 【洞】 (98.9%), 도 【島】 (96.7%), 수 【囚】 (96.7%), 절 【節】 ① (95.5%), 자 【者】 (94.8%), 재 【材】 (93.3%), 질 【質】 (93.3%), 대 【臺】 (91.7%), 사 【士】 (91.1%), 대 【帶】 (90.0%), 사 【社】 (90.0%), 사 【寺】 (90.0%), 대 【隊】 (88.3%), 서 【書】 (86.7%), 심 【心】 (86.7%), 점 【點】 (86.7%), 주 【主】 (86.7%), 장 【場】 (84.5%), 소 【所】 (84.4%), 도 【圖】 (83.3%), 주 【酒】 (82.2%), 선 【線】 (81.9%), 성 【星】 (80.0%), 장 【藏】 (80.0%), 종 【種】 (80.0%), 선 【船】 (77.8%), 제 【祭】 (76.7%),

제【制】(76.7%), 대【大】②(73.3%), 세【稅】(73.3%), 절【節】②(73.3%), 중【腫】(70.0%),
산【山】(68.3%), 중【宗】(66.7%), 당【糖】(64.4%), 사【辭】(60.0%), 신【神】(60.0%)

B 群：調査語彙のすべての語の流音後濃音化実現率が50% 未満

식【式】②(43.3%), 산【酸】(33.3%), 장【葬】(33.3%), 집【集】(33.3%), 시【時】(30.0%),
술【術】(20.0%), 좌【座】(20.0%), 즈【汁】(20.0%), 전【戰】(18.4%), 시【詩】(10.0%),
식【式】③(6.7%), 시【市】(3.4%), 대【大】①(1.7%), 석【席】(0.0%), 족【族】(0.0%)

C 群：その他

사【師】(83.3%), 단【團】(66.7%), 제【劑】(64.4%), 당【堂】(63.4%), 상【上】(63.4%),
상【商】(62.7%), 상【相】(61.7%), 사【史】(60.0%), 소【素】(60.0%), 심【審】³²(60.0%),
도【度】(56.7%), 지【誌】(54.4%), 정【亭】(53.3%), 지【地】(51.1%), 식【式】①(50.0%),
설【說】(48.9%), 당【黨】(40.0%), 전【塵】(40.0%), 상【賞】(36.7%), 시【視】(36.7%),
점【店】(36.7%), 승【僧】(33.3%), 실【室】(22.9%)

A 群は「語彙的に流音後濃音化を起こしやすい漢字語形態素」, B 群は「語彙的に流音後濃音化を起こしにくい漢字語形態素」と概ね目してよさそうである。C 群は語によって流音後濃音化実現如何に大きなばらつきがあり, 語彙的に流音後濃音化を起こしやすいか否かを即座には判断しかねるものである。

次節以降, さらに形態論的, 音韻論的視座から仔細に検討を加えていこう。

4.2.1. 形態論的観点：構成要素の自立性

まず, 〈1 音節 + 2 音節以上〉の場合と同じく, 各要素の自立性が流音後濃音化に関与している。

流音後濃音化が生じにくい B 群の漢字語形態素に着目すると, 식【式】②(43.3%), 산【酸】(33.3%), 시【時】(30.0%), 시【詩】(10.0%), 식【式】③(6.7%), 시【市】(3.4%) のように, 自立性の高いものが多く含まれる。これらはいずれも自立語と結合し, 〈派生語〉ではなく〈複合語〉を形成している。つまり, 自立性が高い要素同士の結合においては流音後濃音化が生じにくい傾向がありそうである³³。流音後濃音化が 4 音節漢字語では基本的に生じないことを勘案すると, 斯かる傾向は, 〈2 音節以上 + 1 音節〉の漢字語合成語における流音後濃音化の実現如何も, 〈1 音節 + 2 音節以上〉のそれと同様に, 音節数よりも, 語構造(複合語か派生語か)に強く統制されていることを示唆している。

なお, 「大学(校)」を意味する 대【大】①を後行要素とする一連の語において流音後濃音化がほとんど生じないのは, 「○○대」が「○○대학(교)」の縮約形であるからであり, 流音後濃音化が生じないのは当然と言えば当然である。

³² なお, 後行要素を「審」とする語は, 사실-심(40.0%), 제일-심(80.0%)の 2 語だが, ある母語話者の指摘によると, 제일심は「제일-심」ではなく「제-일심」と認識している話者も多いという。このことを考慮すると, 제일심で流音後濃音化が起きやすいのは当然のことで(2 音節漢字語では流音後濃音化がほぼ起きる), 사실-심의流音後濃音化実現率が 50% を切っていることからすると, 「審」は本来は B 群に属する可能性がある。因みに, 국립국어연구원(1999)の発音表示でも 사실-심では流音後濃音化が起きないことになっている。

³³ なお, A 群の中にも 산【山】, 신【神】など, 自立性の高い漢字語形態素が一部含まれ, 絶対的なものではない。

4.2.2. 音韻論的観点

4.2.2.1. 先行要素に濃音を含むか否か

次に、先行要素に濃音を含む語においては、総じて流音後濃音化が起きにくい。

調査語彙のうち、先行要素に濃音を含むものは、특별-세 《特別税》(53.3%), 남골-당 《納骨堂》(40.0%), 목질-소 《木質素》(40.0%), 굴절-도 《屈折度》(33.3%), 삭발-식 《剃髮式》(33.3%), 접골-사 《接骨師》(33.3%), 발달-사 《發達史》(26.7%), 접골-술 《接骨術》(20.0%), 학술-지 《學術誌》(20.0%), 확실-시 《確實視》(20.0%), 탁발-승 《托鉢僧》(13.3%), 특별-상 《特別賞》(0.0%), 특별-석 《特別席》(0.0%), 특별-시 《特別市》(0.0%) の14語だが、いずれも流音後濃音化実現率が低い。특별-세 (53.3%), 남골-당 (40.0%), 목질-소 (40.0%) など、流音後濃音化実現率が一見比較的高く見えるものも、同一漢字語形態素を後行要素とする他の語と比較すると、相対的に流音後濃音化実現率が低いことが分かる。つまり、先行要素に濃音を含むことが流音後濃音化を防遏していると言いうる。これは、異化の一種であり、4.1.2.1. で見た傾向と本質的に同じものである。このことを考慮すると、上でC群に分類した사【師】、당【堂】、사【史】、소【素】、지【誌】、상【賞】、시【視】、승【僧】は本来的にはA群に分類されるべき漢字語形態素である可能性が非常に高い。

4.2.2.2. 先行要素に激音を含むか否か、鼻音化を伴うか否か

また、後行要素を同じくする語群の中で相対的に流音後濃音化が起きにくい語には、先行要素に濃音を含むもの以外に、先行要素に「激音(有気音)を含むもの」や「鼻音化(口音の鼻音化、流音の鼻音化)を伴うもの」が散見される。

例えば、先行要素に激音を含む침몰-선 《沈没船》(60.0%) は、激音を含まない보물-선 《宝船》(93.3%) や화물-선 《貨物船》(80.0%) に比べて流音後濃音化が起きにくい。

また、〈口音の鼻音化〉を伴う식물-대 《植物帶》(80.0%) は、〈口音の鼻音化〉を伴わない생활-대 《生活帶》(100.0%) に比べて流音後濃音化が起きにくい。〈流音の鼻音化〉および〈口音の鼻音化〉の双方(相互同化: reciprocal assimilation)を伴う법률-상 《法律上》(40.0%) といずれの鼻音化も伴わない사실-상 《事實上》(86.7%) を比べた場合も同断である。先行要素に濃音を含む場合に比べると例外も多いため、絶対的なものではないが、ひとつの緩い傾向として指摘しうる³⁴。

4.2.2.3. 後行要素が /s/ で始まるか否か

さらに、同一の語であっても、話者によって流音後濃音化が起きたり起きなかったりするもの、つまり個人差が大きいものは、〈1音節 + 2音節以上〉の漢字語合成語の場合と同じく、後行要素が /s/ (ㅅ) で始まるものが聊か多いように思われる。後行要素が /s/ で始まる語のうち、流音後濃音化実現如何の個人差が大きいもの(茲でも流音後濃音化実現率が40% から69% までのものを個人差が大きいと目す)は、26.7%, すなわち4分の1以上を占める。なお、後行要素が /d/ (ㄷ) で始まる語群の場合は20.0%, /j/ (ㅈ) で始まる語群の場合は20.6% であり、統計的には顕著な逕庭とは言い難いが、4.1.2.2. で論じたことも考慮すると、指摘に値するものと愚攷する。

³⁴ 先行要素で〈鼻音化〉を伴う漢字語合成語において流音後濃音化が起きにくいのは、入力をそのままの形で残したいという、所謂〈忠実性(faithfulness)の原理〉に背馳するためだと考えることもできるかもしれない。忠実性の原理については、窪蘭晴夫(1999: 113-115)を参看されたい。

4.3. 漢字語人名（姓＋名）

漢字語人名（姓＋名）については、全8語を調査した。結果は次の如くである：

【表3】漢字語人名とその流音後濃音化実現率

人名	流音後濃音化実現率
길-선주	40.0%
길-재	80.0%
설-순	66.7%
설-정식	33.3%
설-진	33.3%
제갈-선주	0.0%
제갈-진	13.3%
필-승	73.3%

語例が少ないためにはっきりとしたことは断じ得ないが、まず、〈2音節＋2音節〉の姓名（제갈-선주）では流音後濃音化が起きないと言えそうである。これは〈2音節＋2音節〉の漢字語合成語一般の流音後濃音化のありようと軌を一にするものである。

〈1音節＋2音節〉の姓名（길-선주, 설-정식）では、個人差があるものの、いずれも流音後濃音化実現率が50%を下回っており、流音後濃音化が生じにくい傾向を認めうる。

〈2音節＋1音節〉の姓名（제갈-진）では、流音後濃音化が非常に生じにくいと言いうる。

〈1音節＋1音節〉の姓名（길-재, 설-순, 설-진, 필-승）については、설-진以外は流音後濃音化が起きやすい。설-진のみが流音後濃音化が起きにくい理由は分明的でないが、もしかすると、길-재, 설-순, 필-승がすべて歴史上の著名な人名であるのに対し、설-진はそうでないからかもしれない。

4.4. 人名＋전【展】

〈人名＋전【展】〉については、全3語を調査した。結果は次の如くである：

【表4】〈人名＋전【展】〉とその流音後濃音化実現率

人名＋전	流音後濃音化実現率
김찬일-전	0.0%
김현철-전	13.3%
장문걸-전	0.0%

〈人名＋전【展】〉という構造では、流音後濃音化はほぼ起きない。これは、話者が人名と전【展】の間に明瞭なる形態素境界を感じ、短い休止を置いて発音する傾向があったからである。김현철-전においてのみ流音後濃音化が生じた話者がいた要因は不明である。

4.5. 人名＋저【著】

〈人名＋저【著】〉については、全3語を調査した。結果は次の如くである：

【表5】〈人名+저【著】〉とその流音後濃音化実現率

人名+저	流音後濃音化実現率
김소월-저	6.7%
양석일-저	6.7%
이병률-저	0.0%

〈人名+저【著】〉という構造でも、流音後濃音化はほぼ起きない。これも、〈人名+전【展】〉の場合と同じく、話者が人名と저【著】の間に明瞭なる形態素境界を感じ、短い休止を置いて発音する傾向があったからである。

5. 結語

茲まで、現代朝鮮語の流音後濃音化の実現様相について攷察を加えてきた。最後に、本稿の梗概を整理し、擧筆する。

まず、全体的な傾向として、〈1音節+2音節以上〉よりも〈2音節以上+1音節〉の構造のほうが流音後濃音化が起きやすいということを指摘しうる。前者の流音後濃音化平均実現率は48.1%、後者のそれは64.8%であり、16.7%の逕庭が認められる。複合語も一部含まれるが、大まかな傾向としては、接頭派生語よりも接尾派生語のほうが流音後濃音化が起きやすいと言ってよからう³⁵。この結果は、朝鮮語の派生語内部において、一般に語基との結びつきが接頭辞よりも接尾辞のほうが強いことに起因するものと考えうる³⁶。

次に、形態論的な観点から照射すると、〈1音節+2音節以上〉の漢字語でも〈2音節以上+1音節〉の漢字語でも自立性が高い要素同士の結合においては、流音後濃音化が起きにくい。つまり、流音後濃音化の実現如何は主に音節数よりも、語構造（複合語か派生語か）が続べていると言いうる。

音韻論的な観点から照射すると、〈1音節+2音節以上〉の漢字語においては後行要素に、〈2音節以上+1音節〉の漢字語においては先行要素に濃音が含まれる場合には、流音後濃音化が起きにくい。これは異化の一種であり、日本語の連濁の〈ライマンの法則〉に類似した現象と見うる。〈2音節以上+1音節〉の漢字語については、先行要素に激音が含まれるものや、先行要素で鼻音化（口音の鼻音化、流音の鼻音化）が生起するものも、流音後濃音化が起きにくい傾向がある。

また、後行要素が/s/で始まるものは、/d/や/j/で始まるものに比べて流音後濃音化の実現如何に個人差が顕著な語が相対的に多い。

さらに、なじみ度が低い語においては、流音後濃音化が起きにくい（特に〈1音節+2音節以上〉の漢字語）。

漢字語人名（姓+名）では総じて、〈2音節+2音節〉、〈1音節+2音節〉、〈2音節+1音節〉のものは流音後濃音化が起きにくく、〈1音節+1音節〉のものは起きやすい。

³⁵ これは2章で言及した車美愛（1996）の主張とも吻合する。

³⁶ これは、朝鮮語には元々接頭辞は存在せず、多くの接頭辞が自立語に由来することと無関係ではなからう。菅野裕臣（1990: 339）参照。所謂〈n挿入〉も、〈接頭辞+語基〉という構造では起きるのに対し、〈語基+接尾辞〉という構造では起きないこと（ただし後行要素が/y/で始まる漢字語を除く）を併せて想起されたい。〈n挿入〉については、辻野裕紀（2012, 2013, 2014ab）を参照。

〈人名+전【展】〉, 〈人名+저【著】〉では, 流音後濃音化はほとんど起きない。

以上, ソウルでの調査結果の解析を通して, 3音節(以上)の漢字語合成語の流音後濃音化如何には種々の要因が伏流し, 重層的に関与していることを明らかにした。また, クリアカットに流音後濃音化実現率が100% 或いは0% という数字で現れた語は少なく, 大半の語において個人差が認められることも併せて見た。すなわち, 流音後濃音化に関しては, 辞書の規範に背馳する発音も確乎たる言語事実として存在するわけで, 辞書の記述や単一の研究者の判断に依拠する従前の諸研覈では闡明しえなかった流音後濃音化の実現実態の露頭が, 本稿の浅析により聊かなりとも見え始めたと言えよう。

参考文献

(1) 日本語文献

- 菅野裕臣 (1990) 「朝鮮語 —その系統論以前の諸問題」, 崎山理編『日本語の形成』, 東京: 三省堂.
- 木部暢子 (2007) 「調査方法を選ぶ」, 小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言調査』, 東京: ひつじ書房.
- 窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の音声』, 東京: 岩波書店.
- 河野六郎 (1961) 「古代朝鮮語に於ける母音間のㄷの変化」, 『朝鮮学報』21・22, 天理: 朝鮮学会. 【河野六郎 (1979) に再録】
- 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集1』, 東京: 平凡社.
- 高山倫明 (2012) 『日本語音韻史の研究』, 東京: ひつじ書房.
- 車美愛 (1996) 「漢字語の濃音化 —側音後濃音化の場合—」, 『人文学論集』14, 大阪: 大阪府立大学人文学会.
- 車美愛 (1997) 「現代韓国語の鳴音後濃音化について (Ⅱ)」, 『大阪府立大学紀要 (人文・社会科学)』45, 大阪: 大阪府立大学.
- 車美愛 (1999) 「Ⅱ類・Ⅲ類の濃音化字音素 —「床」, 「性」, 「税」, 「状」, 「帳」, 「調」, 「罪」, 「的」の場合—」, 『人文学論集』17, 大阪: 大阪府立大学人文学会.
- 車美愛 (2004) 「濃音化字音素の分類と特徴」, 『人文学論集』22, 大阪: 大阪府立大学人文学会.
- 趙義成・呉文淑 (2004) 「朝鮮語」, 『言語情報学研究報告4 通言語音声研究 音声概説・韻律分析』, 東京: 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
- 辻野裕紀 (2012) 「現代朝鮮語の〈n 挿入〉をめぐって —形態論的条件と語種論的条件を中心に—」, 『外国語教育研究』15, 東京: 外国語教育学会.
- 辻野裕紀 (2013) 「言語形式の自立性と音韻現象 —現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として—」, 『朝鮮学報』229, 天理: 朝鮮学会.
- 辻野裕紀 (2014a) 「現代朝鮮語の〈n 挿入〉に関する一考察 —発生論と機能論—」, 『韓国朝鮮文化研究』13, 東京: 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.
- 辻野裕紀 (2014b) 「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について (1) —若年層ソウル方言話者を対象に—」, 『朝鮮学報』232, 天理: 朝鮮学会.
- 辻野裕紀 (2015a) 「現代朝鮮語における言語規範と認識度 —いわゆる〈saisios〉を対象に—」, 『韓国朝鮮文化研究』14, 東京: 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.

辻野裕紀 (2015b) 「現代朝鮮語の漢字語〈流音後濃音化〉浅析」, 第2回中・日・韓比較文化研究国際学術研討会発表要旨 (於中国瀋陽航空航天大学, 2015年10月18日).

油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編 (1993) 『朝鮮語辞典』, 小学館・金星出版社共同編集, 東京: 小学館.

(2) 朝鮮語文献

국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』, 서울: 두산동아.

배주채 (2003) 『한국어의 발음』, 서울: 삼경문화사.

엄태수 (2013) 『표준어의 음운현상에 대한 연구』, 서울: 박문사.

【附記】本論文は、辻野裕紀 (2015b) に一部鈹鉞を加えたものである。調査に快く協力してくださったインフォーマントの皆様には衷心より感謝申し上げたい。また、本研究は、平成25-26年度科学研究費若手研究 (B) (研究課題番号: 25770151) 「現代朝鮮語における〈濃音化〉の総合的研究」の成果の一部である。

Analysis of “Post Liquid Tensification” in Modern Sino-Korean Words

TSUJINO Yuki

This article discusses “Post Liquid Tensification (PLT)” in modern sino-Korean words.

PLT is well known to occur in two-syllable sino-Korean words without exception. However, in sino-Korean words with more than three syllables, its occurrence varies depending on the word. Hence, I set total 15 young Seoul dialect speakers as informants, and carried out a survey on a total 306 sino-Korean words with (more than) three syllables in which PLT may occur. A summary of the analysis results is as follows.

First, there is an overall tendency for the “two or more syllables + one syllable” structure to have tense after liquids more than “one syllable + two or more syllables”. An approx. 17% gap is observed in the average occurrence rate of PLT in both groups. In the surveyed vocabulary, some compound words are included, but as a general tendency, PLT can be said to occur more frequently in suffix derivatives than in prefix derivatives.

Next, when viewed from morphological standpoint, regardless of the sino-Korean words with “one syllable + two or more syllables” or “two or more syllables + one syllable”, PLT does not readily occur when elements with higher independence are connected. In other words, occurrence of PLT can be said to be controlled by word structure (compound words or derived words) rather than the number of syllables.

When viewed from a phonological standpoint, when a tensed sound is included in the latter element in sino-Korean words with “one syllable + two or more syllables”, and when a tensed sound is included in the first element in sino-Korean words with “two or more syllables + one syllable”, occurrence of PLT is rare. This is a type of “dissimilation”, and can be viewed as a phenomenon similar to Lyman’s Law, which governs “rendaku (sequential voicing)” in Japanese.

In addition, the occurrence of PLT is also affected by the first sound of the latter element, and familiarity of the speaker to the word.